

# 写真アルバムから

## シリーズC 寺社華風月 (白黒)

### C12 當麻寺 1975

森隆一



當麻寺 (Google Mao)

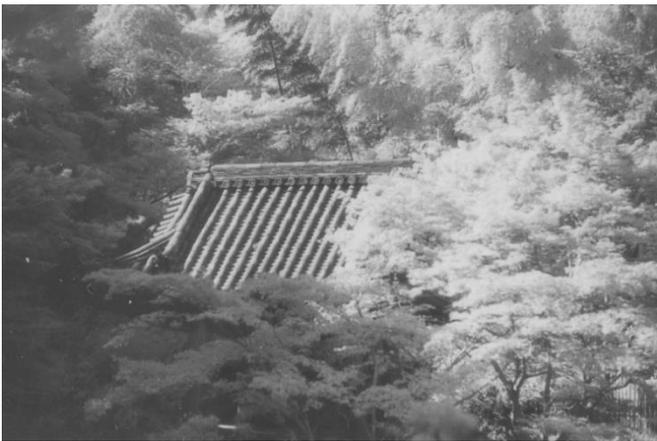
## C12. 當麻寺 1975

京都市内にある寺社で、そこそこの写真が撮れそうで人の少なく、簡単にいける所はほぼ終わりがみえてきた。そこで、滋賀・奈良に目を向けることになる。手始めは、C10章で採り挙げた法起寺・法隆寺にでかけた。これに続いて、名前に引かれて當麻寺に出かけた。當麻寺駅は近鉄南大阪線なので、橿原神宮前で乗り換えた。十三駅を閑散とさせたような印象を受けたことを覚えている。

写真撮影において、昼食の記憶が全くない。京都市内ならば、食事後に出かけることは可能で、実際にそうしていたはずである。當麻寺は、銀閣寺→京都駅→橿原神宮前→當麻寺と、片道3時間近くかかる。9時にでたとしても、着くのは昼であり、門前の商店街で昼食をとったような気もするが、定かではない。

赤フィルタを着けて撮影すると面白い写真が撮れると自慢していたら、赤外フィルムでは青空が暗くなり、葉が白く写るということを教えられ、購入した。広河原で試してみたが、うまく用いられなかった。

ここでは再チャレンジを試みた。なお、この日は快晴であった。



面白い写真は上の2枚である。上の写真は、下右の写真の中央部分をトリミングし、露光を多めにして引き伸ばしたものである。露光は中間のほうが間と思われる。

これ以外はピンボケした写真になっていた。初めての使用であり、原因は距離の赤外補正であるが今でも解決法は掴めていない。広角レンズで、ピントを遠くにして、絞り込むことが簡単な方法である。

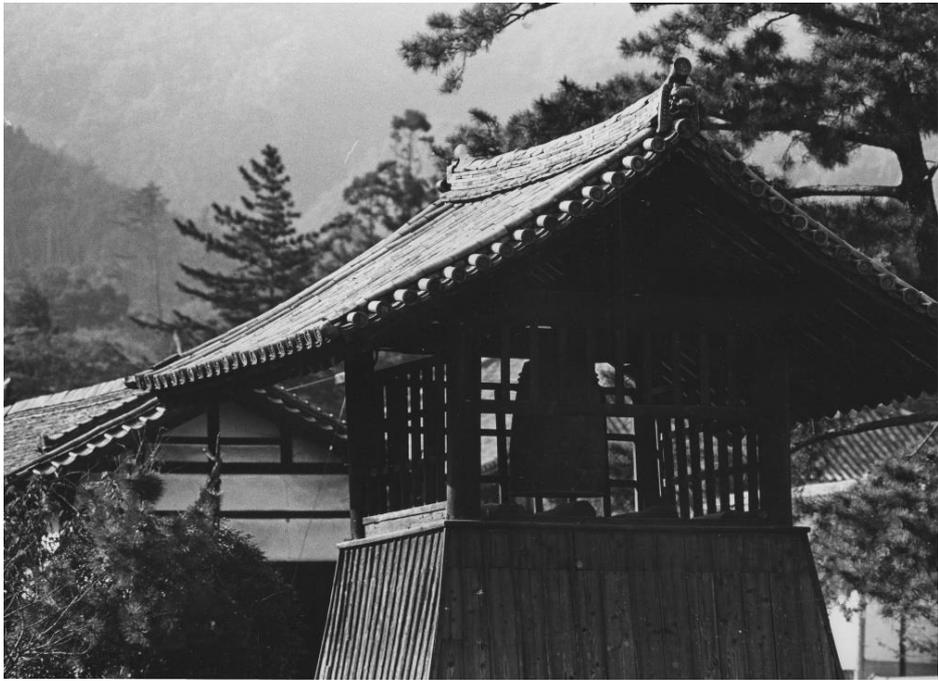


左の写真は山門から門前の商店街を撮ったもので、右は三重塔である。次の3枚も境内で撮ったものである。上の2枚と同様に、もやっとしている。ピントの問題が考えられる。



葉が白く写るのは、葉緑素が赤外線を吸収するためということである。このため、樹種や時期により写り方が異なることになる。また、雲が白くなり、より強調される。

以下は普通の白黒フィルムによる撮影である。







## あとがき

赤外フィルムについて調べてみた。

Wikipedia「赤外線フィルム」では、

赤外線フィルムは、赤外線領域に感度を持ったフィルムである。

かつてコダックやコニカが製造、販売していた。普通はモノクロフィルムであるが、コダックはリバーサルフィルムも販売していた。両社ともに製造を中止しており、現在はローライやイルフォードの販売しているものが残っている。

臭化銀固有の感光波長域が紫から青(およそ400~500nm)にあるため、赤外線撮影を行うには、これらの波長域をカットするフィルター(R-64, SR-60など赤色系のフィルター)が必要となる。

絵画の鑑定、空中写真、医学用途、天体写真(星雲の中には赤外線を放射しているものがある)など特殊な用途向けではあるが、その特殊な効果を生かし、一般撮影でも用いられる。一般撮影に用いると、遠景は霞みの影響を受けずにはっきりと写り、青空は黒く、雲は真白に描画されるため、迫力のある効果を出すことができる。また、植物の緑は輝くように白く写り、直射日光の当たらない陰の部分は黒く写るため、幻想的な効果も期待できる。

赤外線は可視光よりも波長が長いため、一般のカメラでの赤外線撮影は、レンズの焦点距離や撮影条件に注意する必要がある。波長の違いから、普通の可視光用レンズでは焦点距離がずれる場合があり、ピンぼけになる場合がある。その場合、補

正が必要となる。補正が必要なレンズでは、赤外補正マーク(赤印、R マーク)があり、可視光でピントを合わせた後に補正マークまで移動させることで赤外線の良いピントとなる。オートフォーカスカメラでも、マニュアルフォーカスに切り替えて補正する必要がある。ただし、最近のオートフォーカス用レンズでは補正の必要のないものもある。また、カメラの露出機能は可視光用のため、赤外線量に応じた露出を求めることができない。赤外線フィルムのパッケージやデータシートに書かれている撮影条件を参考にして、マニュアルで絞りやシャッター速度を合わせる必要がある。

と書かれている。